



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

# バイリンガル児の語彙量と言語環境の変化についての予備的検討

著者	久津木 文
著者別名	KUTSUKI Aya
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	14
ページ	15-22
発行年	2011-03-21
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001487">http://doi.org/10.14946/00001487</a>



# バイリンガル児の語彙量と言語環境の変化についての予備的検討

久津木文

---

## A Preliminary Study of Development of Vocabulary in a Bilingual Child and Changes in the Linguistic Environment

KUTSUKI Aya

### Abstract

This is a preliminary study of vocabulary development of the two languages in a bilingual child and changes in his linguistic input between 29 months and 45 months. At the time the child's linguistic input mainly consisted of English, and he was more dominant in English than in Japanese. However, when compared with monolingual children of his age, it was found that his vocabulary age was lower in both languages. His Japanese vocabulary suffered a temporary attrition due to continuous and increasing opportunities to use English. To prevent such attrition, some strategic changes in parental input were observed. These suggest that the linguistic ability and environment of bilingual children are highly variable and interactive and thus multidimensional research is necessary.

本調査では1人のバイリンガル児を対象に29ヶ月から45ヶ月までの間の二言語の語彙と入力環境の変化を分析した。入力が英語に大きく偏っていたため本調査の対象の子どもはどの時点においても英語のほうが日本語よりも相対的に優勢であった。しかし、どちらの言語の発達年齢もモノリンガル人口と比べると劣っていることが判明した。英語を用いる機会が増えるにつれ日本語の理解や表出が減少するという一時的な喪失が認められ、さらにはそれを防ぐように親の入力が戦略的に切り替わっていることがわかった。このことから、乳幼児期のバイリンガル環境と能力は非常に可変的で相互的に影響を及ぼしており、多元的な調査が必要であることが示唆された。

### 1. はじめに

2011年度、つまり今年度から公立小学校で週一コマ英語活動が実施されるようになる。週1コマの時間英語に触れることが、どの程度学童児に影響を及ぼすのかについては実

のところわからないことだらけである。早期言語教育の背景には“ネイティブ”のように語学を身につけるには臨界期前の導入が必要であるという考えの存在がある。しかし早期の英語教育の影響として一部から危惧されていたのは、英語の母語への悪影響である。まだ母語を獲得中である子どもにもう一言語足すと母語はどうなるのかという不安が付きまとうのである。特に、日本語を含む二言語の早期の同時獲得について我々は知らないことが多すぎる。このようなことから、二言語を乳児期から同時に獲得している「同時バイリンガル」の語彙の発達について調べることは重要であり、早期言語教育に知見をもたらすことができるであろう。留意しておきたいのは『同時』といっても「同量」及び「同質」の入力が保持されているバイリンガル環境はまずないという点である。同様に、二つの言語の入力が同量であることもほぼ不可能であり、双方の言語について同じ量の知識をもつといわれる均衡バイリンガルも定義上のことばでしかない(久津木, 2006)。バイリンガル言語獲得研究の多くは、移民や少数言語コミュニティで育つ子どもであったり、国際結婚や海外赴任をする研究者自身の子どもが対象になることが多く、二言語の入力はある程度安定していると捉えられている場合が多い。確かに子どもの言語能力を調べる際に、環境からの変数は一定であるほうが望ましいであろう。現に成人の言語実験などでは、「バイリンガル」とひとくくりに行われている場合が多い。しかし、子ども自身の言語能力のみならず言語環境は非常に可変的で動的なものであることが Yukawa (1998) などで報告されている。特に、日本のように日本語が社会のどの側面(政治・経済・教育など)においても主流言語である国では、国際結婚の家庭であってもどちらかの言語の入力に極端に偏っている場合が多いようである。しかしながら、両言語の入力の変化と子どもの獲得との関係について詳細に調べている研究は数えるほどしかない。そして対象の性質上仕方がないことではあるが、バイリンガル言語獲得研究の多くがダイアリー法や音声の書き起こしデータを基にしており、他のバイリンガル児のデータをモノリンガル児と比較することが現実的に非常に困難になってしまっている。

そこで著者は同時バイリンガル幼児の語彙データを日本語・英語それぞれ標準化された詳細な語彙質問紙を用いて調べることで二言語の同時獲得の様相をより明らかにすることを試みる。特に本稿では1人のバイリンガル幼児が29ヶ月から45ヶ月の間に獲得した総合的な語彙量の変遷と言語環境との関連をみる。

## 2. 方法

### 2.1 対象児

日本のK市に住む北米出身の英語を母語とする父親と日本出身の日本語を母語とする母親の夫婦に生まれた男児L。

### 2.2 言語環境

両親の母語は異なるが、ほぼ家庭内一言語(英語)で育てている様子。41ヶ月から英語のプレスクールに通うようになるがそれまでは家庭内で過ごす5歳上の兄はインターナショナルスクールに通っており、英語を主に話す。

## 2.3 手続き

Lの両親に調査依頼し、下記に解説する言語発達質問紙を郵送で配布し記入後返送してもらった。Lが29ヶ月の時点から45ヶ月の間9回実施。9回の実施時期は次の通りであった: 29ヶ月, 30ヶ月, 32ヶ月, 33ヶ月, 34ヶ月, 35ヶ月, 37ヶ月, 41ヶ月, 及び45ヶ月。

## 2.4 質問紙

### 言語発達質問紙

乳幼児の言語発達を調べる質問紙として英語版と日本語版の双方が存在するものを選択した。英語版は MacArthur-Bates Communicative Development Inventory: Words and Gestures 及び MacArthur-Bates Communicative Development Inventory: Words and Sentences (Fenson, Marchman, Thal, Dale, Reznick, & Bates, 1992) であった。日本語版は『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」』(小椋・綿巻, 2004), 及び『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』(綿巻・小椋, 2004) であった。それぞれの質問紙が対象としている月齢の範囲は次のとおりである。日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の場合、語彙版は8ヶ月から18ヶ月、文法版は16ヶ月から36ヶ月、英語版 MacArthur-Bates Communicative Development Inventory の場合はそれぞれ8ヶ月から16ヶ月と16ヶ月から30ヶ月である。年少用の語彙版では「表出」のみではなく「理解」についても調べることが可能である。

語彙版及び文法版とも語彙を中心にした項目で構成されている。具体的には、日本語版(語彙版)には語彙項目448項目、日本語版(文法版)の語彙項目には(771項目)、英語版(語彙版)には語彙項目が396項目、英語版(文法版)には語彙項目には680項目が存在する。語の種類はその性質や場面によって下位カテゴリーに分類されている。下位カテゴリーは英語版には「助動詞」の項目や、日本語版には「おにぎり」があつたりと英語版と日本語版で具体的な語彙は文化や生活習慣や言語的な特徴などに合わせ異なっているものの、語彙の分類である下位カテゴリーとカテゴリーに属する語の数はある程度共通化されている。語彙版及び文法版、そして両言語版で共通している下位カテゴリーと語彙の具体例を表1としてまとめた。

本稿の調査対象は開始時点で27ヶ月であったが、これまでの経験からバイリンガルの子どもは全般的にモノリンガルの同年齢の子どもよりも表出語彙が少ない場合が多く、文法版を配るのは適当ではない場合が多かった。このことから、調査開始から3回目まで(29, 30, 32ヶ月)のときには両言語とも語彙版を配布したのだが、英語の語彙がかなり多い様子であったため、より多い種類の語彙が確認できる文法版に両言語とも移行した。ここで特に取りこぼさないように注意したのは、バイリンガル乳幼児によくみられる silent bilingual の状態である。silent bilingual というのは passive bilingual とも呼ばれる状態の話者で、相手の言っていることは理解できるが自分からその言語で話さない二言語使用者である。実際に、わかっているようなのに全くその言葉を話そうとしないというバイリンガルの幼児を今まで多くみてきたため、本調査ではこのような沈黙の能力を取りこぼさないように注意した。具体的には、文法版では本来存在しない「理解」について各語につい

てチェックできるよう変更を加えた。よって、理解語彙数を文法版でも調べる事が可能となったが、この部分については標準化されていないため発達年齢を正確に出すことはできない。

両言語版とも標準化されておりそれぞれの言語の言語発達年齢や同年齢のどの程度の能力をもつかを調べる事が可能である。

表 1: 日本語及び英語版マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の下位カテゴリーと語彙の例

日本語版下位項目	語の例	英語版下位項目	語の例
1 幼児語	ガオー	1 sound effects and animal sounds	grr
2 動物	ぞう	2 animals	elephant
3 乗り物	バス	3 vehicles	bus
4 おもちゃ	ボール	4 toys	ball
5 食べ物と飲み物	さかな	5 food and drink	fish
6 衣服	靴下	6 clothing	socks
7 体の部分	指	7 body parts	finger
8 家具と部屋	イス	8 small household items	chair
9 小さな家庭用品	引き出し	9 furniture and rooms	drawer
10 戸外のもの	動物園	10 outside things	zoo
11 人々	赤ちゃん	11 people	baby
12 日課とあいさつ	ありがとう	12 games and routines	thank you
13 動作語	行く	13 action words	go
14 時間	あとて	14 words about time	later
15 ようす・性質	かわいい	15 descriptive words	cute
16 代名詞	それ	16 pronouns	it
17 質問	なに	17 question words	what
18 位置と場所	うしろ	18 prepositions and locations	back
19 数量	もっと	19 quantifier	more

### 言語環境についてのアンケート

言語獲得、特にバイリンガル言語獲得において子どもが置かれている言語環境を調べることは非常に重要である。そこで、Lがどのような言語入力を聞いているかを尋ねるために母親・父親それぞれに対してどのようにお互いに会話をし、どのように子どもに話しかけているか、そして、生活にどのような変化があったかなどについての項目を含んだアンケートを作成し上記の言語発達質問紙と同時に郵送・回収した。

### 3. 分析と結果

#### 語彙発達の変遷

Lの英語及び日本語の理解語彙と表出語彙の数の発達的变化を図1に示した。日本語より遥かに英語の語彙の理解と表出が多いことがみてとれる。

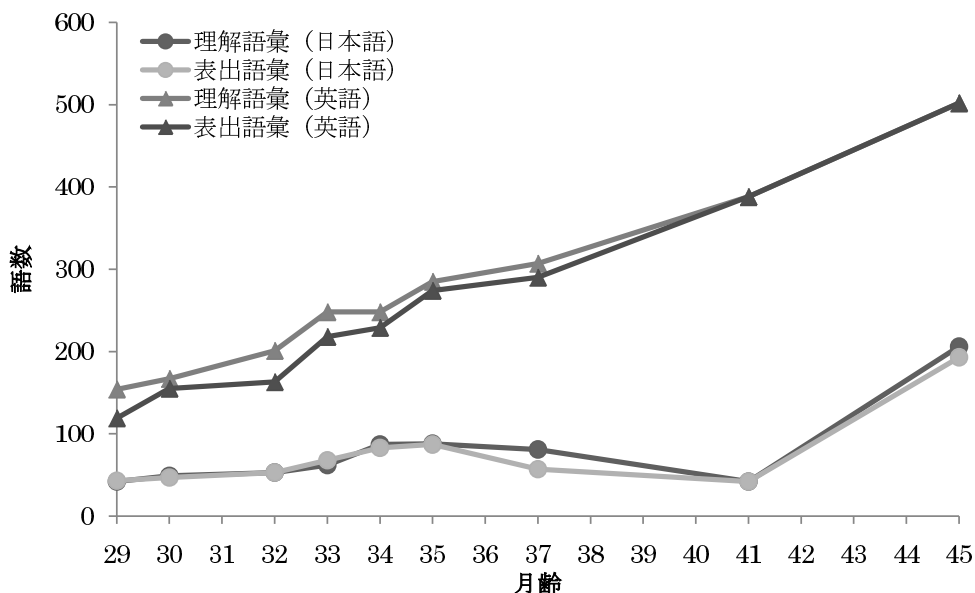


図1: 日本語及び英語の理解語彙数と表出語彙数の発達的变化

収集したデータをもとに語彙発達年齢を調べた(表2)。

語彙数の変化でみたように特に表出語彙の語彙年齢は日本語よりも英語のほうが高い。しかし、モノリンガルの子どもの能力との関係で見た場合(つまり標準化データと照らし合わせると)、Lの英語表出語彙は、あまり高いほうではないことがわかる。相対的に英語のほうが日本語よりも強いといえるものの、同月齢のモノリンガルの語彙知識と比べかなり遅れていることがわかる。

英語の理解・表出語彙数や語彙発達年齢は継続して増加しているのに対して、日本語表出語彙数・理解語彙数そして語彙年齢においても37ヶ月から41ヶ月の間に低下がみられる。モノリンガルの発達では急激に理解語彙数や表出語彙数が低下することはほとんどないと思われるがバイリンガルの子どもの場合一時的にどちらかの言葉が出てこなくなるという状況はよくある。一般的に学習した第二言語を使う機会がないため忘れてしまうことを「(第二言語の)言語喪失」と呼ぶのだが、Lの場合にはどちらも母語ではあるものの「一時的な言語喪失」の状態に入ったのだと思われる。この期間にLの言語環境や入力に具体的にどのような変化があったかについては次節で解説する。

表 2: 日本語及び英語の語彙発達年齢 (月齢) の推移

生活年齢	日本語語彙発達年齢		英語語彙発達年齢	
	理解	表出	理解	表出
29	17~22	21~22	16~16	22~23
30	17~18	21~22	15~16	23~24
32	17~18	21~22	15~16	24~25
33	17~18*	23~24	16~*	25~26
34	18*	23~24	16~*	25~26
35	18~19*	25~26	16~*	26~27
37	18~19*	21~22	16~*	27~28
41	15~16*	21~22	16~*	29~30
45	18 以上*	27~28	16~*	29~30

\*文法版の質問紙には理解語彙項目が本来は存在しないため語彙版の標準化データに基づき発達年齢を計算した。日本語は 18ヶ月, 英語は 16ヶ月以上の能力を推測できない。

### 3.1 言語環境と入力の変化

調査期間の間に起こった言語環境の変化 (両親の言語入力の状態) や環境の変化を表 3 としてまとめた。特に興味深いのは 37ヶ月と 41ヶ月及び 45ヶ月の時期に言語環境が大きく変化した点である。37ヶ月では上の兄が夏休みに入り家庭で過ごす時間が多くなり, 家庭内では基本的に英語を話す家庭であるためさらに英語の入力が強調されたようである。さらにその後 6 週間カナダに帰省し, 英語環境にどっぷりつかることとなる。41ヶ月時点では日本語を忘れてしまったかのように見えると親もコメントしている。L の過ごす環境そのものも, 41ヶ月でインターナショナルプレスクールに通園することになり大きく変化する。実際, 37ヶ月の時点も含めこの時点で L の日本語語彙数と語彙年齢は低下することとなる。学校や幼稚園に通い始めることでそこで使われている言語 (家庭外) 言語が子どもに中でかなり強くなり, 家庭内言語が弱くなるケースをよくみるが, L の場合, 日本語はそもそも入力が少ないところにさらに英語入力が強調される環境となったため日本語能力が低下したのだと考えられる。

バイリンガル言語発達についての多くの研究では, 親の言語入力がある程度固定されているかのように扱われているが実際はそうではない場合が多いということをも冒頭で述べた。本調査の結果は親の入力自体も可変的であることを示している。まず 34ヶ月から両親はお互いに話をする際に言語を「まぜる」ことをしなくなる。これが何故急に起こったのかはコメントもなく推測にすぎないが, 「切り替え」は良いが同じ会話中に言語を「まぜる」行動はバイリンガルの子どもの言語発達に良い影響を与えないという見解が本などで紹介されているせいかもしれない。もっと意図的な入力の変化もみられる。今回のケースでは, 母親が 45ヶ月の時点で L に話しかける日本語の割合を急激に増加させる。さらには, 母親はこれまで L が日本語で話している中で英語の単語を用いるようなことがあった際にまったく日本語の単語を教えることで修正するということをまったく行ってこな

かったわけだが、この時点で急に常に修正すると答えている。つまり、これまでは家庭内一言語環境を保っていたわけだが、Lの日本語の理解や表出があまりに低下していることを不安を感じ、この時点から親は一親一言語のストラテジーを採用することにしたのである。その努力もあってか、英語と日本語の語彙発達年齢の差は45ヶ月では2ヶ月程度に戻っている。

表 3: 言語環境と言語入力の変化

入力種類	環境			母親から					父親から					イベント・親からのコメント
				子供へ		父親へ			子供へ		母親へ			
月齢	家庭内で過ごした時間 (時間)	主に家庭内で過ごした相手	家庭外で過ごす時間 (幼稚園など)(時間)	家庭外で過ごした場所	英語 (%)	日本語 (%)	修正	まぜるか	まぜるか	英語 (%)	日本語 (%)	修正	まぜるか	まぜるか
29	24	母			90	10	never	no	yes	100	0	never	no	yes
30	24	母			90	10	never	no	yes	100	0	never	no	yes
32	24	母			90	10	never	no	yes	90	10	never	no	yes
33	24	母			90	10	never	no	yes	100	0	never	no	yes
34	24	母			90	10	never	no	yes	100	0	never	no	yes
35	24	母			100	10	never	no	no	90	10	never	no	no
37	24	母			95	5	never	no	no	95	5	never	no	no
41	20	母	4	インターナショナルプレスクール	100	0	never	no	no	100	0	never	no	no
45	19	両親	5	インターナショナルプレスクール	10	90	always	no	no	90	10	never	no	no



#### 4. おわりに

本稿ではケーススタディではあるが、バイリンガル言語環境に身を置く一人の幼児の語彙発達とその入力と環境に焦点を当てて分析を行った。バイリンガルといっても環境や入力が非常に可変的で偏りがあり子どもの言語知識もそれに合わせてかなりの柔軟性をみせることがわかる。さらには、子どもの言語知識に合わせ大人(親)が入力を意識的に変化させることがわかった。つまりは、今回の調査結果はバイリンガルの子どもの育つ言語環境と子どもの言語発達がダイナミックに相互作用していることを示し、多元的な観点からバイリンガルの言語獲得を検討する重要性と必要性を強調するものである。

今回は総合的な語彙数を中心に扱ったわけだが、語彙には様々な種類があり個別言語や文化・生活環境特有のものもあれば共通のものもある。バイリンガル環境に育つ子どもの言語による獲得語彙のタイプや時期の違いについて、今後分析を進める予定である。

#### 参考文献

- Fenson, L., Marchman, V. A., Thal, D. J., Dale, P. S., Reznick, J. S., & Bates, E. (1992). *MacArthur-Bates Communicative Development Inventories (CDIs), Second Edition*. Paul. H. Brookes Publishing.
- Yukawa, E. (1998). *L1 Japanese Attrition and Regaining: Three case studies of two early bilingual children*. Kuroshio, Tokyo.
- 小椋たみ子・綿巻徹 (2004). 『日本語マッカーサー 乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」』. 京都国際社会福祉センター.
- 綿巻徹・小椋たみ子 (2004). 『日本語マッカーサー 乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』. 京都国際社会福祉センター.
- 久津木文 (2006). バイリンガルの言語発達について. 『心理学評論』, **48** (1), 158-174.

**Author's E-mail Address:** ayakutsuki@shoin.ac.jp